



原油、底堅く推移

今週の原油相場は底堅い展開になりそうだ。サウジアラビアなど主要産油国の減産が続き、需給の引き締まりが意識されやすい地合いになっている。



前週も米原油先物は供給が減少するとの観測が材料視された。一時1バレル93ドル台後半まで上昇し、約10カ月半ぶりの高値をつけた。

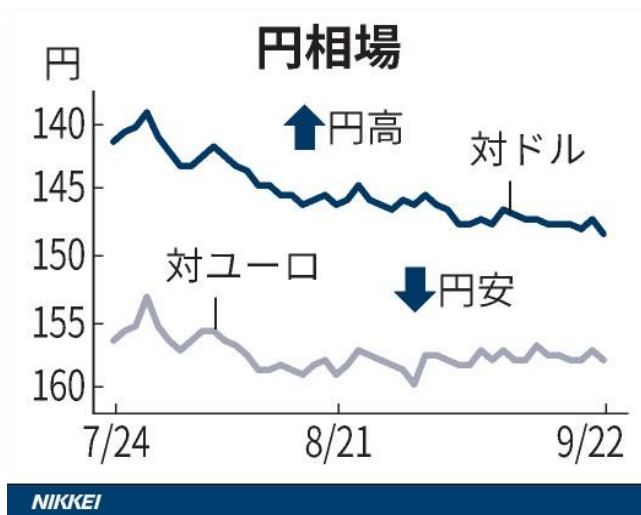
相場の上昇幅は主な消費国、米国の景気や物価情勢が左右するとみられる。26日には9月の消費者信頼感指数が発表される。ニッセイ基礎研究所の上野剛志上席エコノミストは「追加利上げの観測が強まれば、景気後退が意識され原油相場の下押し要因となりそうだ」と話す。

米国で利上げ見通しが強まると、利息が付かない金（ゴールド）の先物価格にも下落圧力がかかりそうだ。国際商品の総合的な値動きを示すリフィニティブ・コアコモディティーCRB指数の上値が重くなる可能性もある。



為替、円は対ドルで下落余地

今週の外国為替市場では円安・ドル高がゆるやかに進みそうだ。前週は日銀の植田和男総裁が金融政策決定会合後の記者会見で現状の金融緩和路線を継続する姿勢を示し、円相場は一時148円台半ばまで円安が進んだ。米国が年内に追加の利上げに踏み切るとの思惑も高まっており、ドル高・円安に振れやすくなっている。



米連邦準備理事会（FRB）が20日に示した米連邦公開市場委員会（FOMC）メンバーの政策金利の見通しは、6月時点から切り上がった。米金利の高止まりが続くとの見方からドル買いが続く可能性がある。

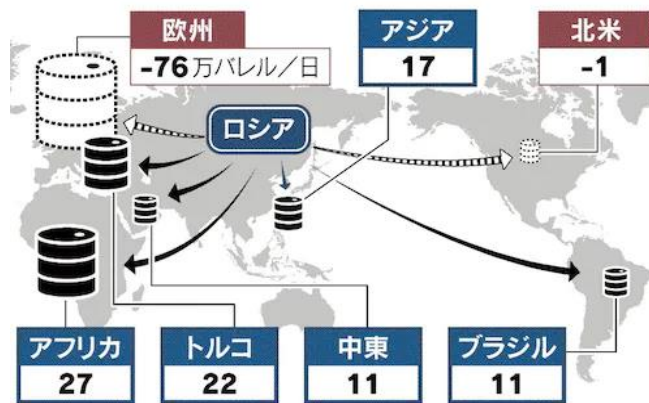
もっとも政府による円安けん制への警戒感も強まる。市場では「心理的な節目となる150円に近づくなか、積極的な円売り・ドル買いは進みにくい」（三菱UFJ銀行の井野鉄兵チーフアナリスト）との声も聞かれた。為替介入への警戒から、急速に円高が進む場面もありそうだ。



ロシア産エネ、続く影響力 経済制裁に限界

世界のエネルギー市場がロシア依存から抜け出せない。同国が21日、石油製品の輸出一時停止を発表すると米欧の軽油先物価格は急騰した。西側の制裁にもかかわらず、アフリカなど「第三極」向け輸出を2022年比3倍に増やし、価格への影響力を維持している。原油価格にも上昇圧力がかかり、1バレル100ドルの大台がみえてきた。

欧米の禁輸以降も第三極に石油精製品輸出を拡大していた(過去7カ月のロシア輸出量の前年比増減幅)



(注) 欧州は北西ヨーロッパおよび地中海西岸地域、アジアは日本と韓国除く、石油精製品は重油除く
(出所) リフィニティブ、海上輸出品

ロシア政府による輸出停止が伝わった21日、欧州の軽油指標の米インターコンチネンタル取引所の軽油先物は、一時前日比5%上昇し、1トン1014.75ドルとなった。1月下旬以来、およそ8カ月ぶりの高値圏にある。米国指標の米ニューヨーク・マーカンタイル取引所の軽油先物も同5%高の1ガロン3.4ドル台後半を付けた。

英業界団体エネルギー・インスティテュートによると22年時点でロシアの石油製品の輸出シェアは1割程度と、米国に次ぐ世界2位の輸出国だ。輸出品の大半を占める軽油は自動車のディーゼルエンジン用燃料のほか、農業機械の燃料や暖房用で使われるため秋口から冬場にかけて需要が増えやすい。

軽油の高騰が原油相場に波及





冬の需要期が近づくなか、ロシアの措置は供給逼迫懸念を生んだ。欧米を含め石油価格の高騰やインフレリスク再燃につながる。

日本を含む主要7カ国（G7）はウクライナ侵攻後の22年5月、ロシア石油の輸入の段階的な禁止措置で合意した。ロシア産への依存が大きかった欧州では22年12月から原油を、今年2月から石油製品の輸入禁止措置を既に実施済みだ。

・欧州分を穴埋め

米欧市場から締め出されたはずのロシアが、今回の輸出停止措置を通じて価格形成に影響を及ぼしたのには理由がある。西側諸国の対ロ制裁に同調しない「第三極」向けに輸出を増やしていたのだ。

金融情報会社リフィニティブの海上輸送データによると、アフリカ・中東諸国やトルコ、ブラジル、中国など「第三極」向けにロシアが輸出した石油製品は、23年2～8月の7カ月間で日量124万バレルだった。日量36万バレルにとどまっていた22年実績に比べて3.4倍に急増した。

特にブラジル向けやアフリカ諸国向けの伸びが大きい。原油高が石油製品にも波及するなか、西側の制裁で「割安」になったロシア産の引き合いは強かった。

2月以降、欧州向けは22年に比べて96%落ち込んだものの、ロシアの輸出量全体は同7%増加し、むしろ世界市場での存在感を高めた。欧米向けの減少分を第三極向けの増加で十分穴埋めできた形だ。

ロシアは石油製品の輸出再開の時期を明らかにしていない。ロシア産の輸入を増やしてきた第三極の国々も一転、別ルートからの調達が必要になる。欧州など西側諸国と競合することになり、価格の上昇圧力につながる。

厳しい制裁にもかかわらず、市場を揺さぶり続けるロシア。その構図は軽油の原料となる原油でも同じだ。9月、石油輸出国機構（OPEC）を率いるサウジアラビアと協調し、年末までの減産継続を決めた。ロシアは欧州向けに代わって中国やインド向けの輸出を増やし、一定の存在感を維持している。

軽油の需給が引き締めれば、原料となる原油にも波及する可能性がある。楽天証券経済研究所の吉田哲コメディティアナリストは「今回のロシアの措置で、原油にも供給面で上昇圧力がもう一段高まった」と指摘する。

米原油指標のWTI（ウエスト・テキサス・インターミディエート）原油先物価格は19日に一時1バレル93ドル台後半と、約10カ月ぶりの高値をつけていた。市場関係者の間では年内の100ドル台乗せを予想する声も出ている。



・国内安定を優先

もっとも今回の石油輸出停止にはロシアの「弱み」も見え隠れする。専門家の間では価格をつり上げて西側を揺さぶる狙いというよりも、「ロシアの国内事情を優先させるための措置」（エネルギー・金属鉱物資源機構=JOGMECの原田大輔調査課長）との見方が多い。

ロシア国内では製油所のメンテナンスなどで製品不足と価格高騰に拍車が掛かっていた。穀物収穫のために農業機械に使う軽油などの燃料が不足しており、生産者などから不満の声が高まっていた。国民の不満の声を放置すればプーチン大統領が再選を目指す24年の次期大統領選にも響きかねない。

ロシアのペスコフ大統領報道官も22日、石油製品の一時的な輸出停止について「市場の安定を確保するために必要な限りの措置を講じる」と記者団に述べ、国内市場の対応を優先する考えを強調した。

ロシア財政は依然として厳しい。ロシア財務省が9月に発表した1～8月の財政収支は、2.36兆ルーブル（約3.6兆円）の赤字となった。石油製品の輸出停止を続ければ外貨収入が落ち込み、財政が一段と悪化しかねないジレンマも抱える。JOGMECの原田氏は「国内の不足が和らげば解除するのではないか」とみる。

アフリカ諸国などの新興国にとっては痛手だ。ロシアから割安な石油の輸入を急増させてきただけに、仮に輸出停止が一時的だったとしても影響は大きい。

アフリカは石油だけでなく小麦など食の分野でも、ロシア産の輸入を増やしている。今回の突然の輸出停止はロシア依存のリスクを改めて世界に印象付けた。



東証、カーボン・クレジット市場開設 10月11日から

東京証券取引所は22日、二酸化炭素（CO2）排出量を取引するカーボン・クレジット市場を10月11日に開設すると発表した。東証は昨年9月に実証実験を開始し、今年6月には10月をめどに開設する方針を示していた。

カーボン・クレジット市場では再生可能エネルギーの活用や森林整備によるCO2排出量の削減分を国が認証する「J-クレジット」を売買する。注文の受付時間は午前と午後の2回に分かれており、午前11時30分と午後3時に価格がつく。排出量1トン単位で売買する。

当初の参加登録者数は188で、三井住友銀行やENEOS（エネオス）などが参加する。金融機関や事業会社以外にも、地方公共団体などが参加登録している。これまでJ-クレジットは相対で取引されていたが、市場を通すことで価格の透明性を高める狙いがある。

東証は経済産業省と連携し、昨年9月から今年1月まで実証実験を実施した。実験期間中に合計で183者が参加者登録し、約15万トン分の排出量の売買が成立した。

経済産業省は脱炭素に取り組む企業で構成する「GX（グリーントランスフォーメーション）リーグ」構想を掲げる。排出量売買の需要は今後さらに高まるとみられ、東証は取引市場を整備することで脱炭素の取り組みを後押しする。



原油高騰でインフレ巡るECBの見解は変わらず

欧州中央銀行（ECB）理事会メンバーのビルロワドガロー・フランス中銀総裁は23日、原油と燃料価格の高騰について、2025年までにインフレ率を2%に戻すというECBの目標を変えることはないと言った。

フランスのラジオで「ガソリンの消費は消費全体の約5%で、インフレ全体のごく一部だ」と語った。

サウジアラビアとロシアが原油の減産延長を表明して供給不足が懸念される中、北海ブレント先物は1バレル=100ドル付近で推移している。

ビルロワドガロー氏は、現在のエネルギー価格の上昇は、ウクライナ戦争開始直後のような広範なものではなく、原油価格の上昇はディスインフレ傾向への脅威ではなくなっていると指摘した。

その上で「われわれの見通しとコミットメントは、25年までにインフレ率を2%に近づけることだ」と強調した。

現在のECBの政策金利については、適切な水準にあると繰り返し、「インフレのピークは過ぎ、基調的なインフレは反転しているようにさえ見える。さらに金利を引き上げるよりも忍耐が重要だ」と述べた。



ENEOS10月
潤滑油仕切り

原材料費増上乗せ 最大3万9900円大幅値上げ

ENEOSは、10月「る潤滑油・グリースの」る。特約店筋による
1日出荷分から適用す「月次価格を引き上げ」と、グループⅢ（基

油）適用商品は9月比
のコスト変動分が総5
9000円の上昇だが、
7月末に予告していた
10月からのグループⅢ
やソルベントなどの原
材料コスト増加分（2
万円）を含めて最大3
万9900円引き上げ
る。油種によっては2
万5900円値上げに
とどまる商品もある。
グループⅢ適用商品
以外（ソルベント使用
の工業用潤滑油）は、
1万9000〜2万49
00円の値上げ。その
他とグリースは590
0円引き上げる。
コウモレックス（旧
アロマオイル）は、コ
スト変動どおり総44
00円、食品機械の潤
滑剤などに使うハイホ
ワイトは7300円
の値上げという。
コスト変動に基づく
特品油種の価格改定は
四半期ごとを実施して
いるが、9月比で工業
用揮発油は6000円
（抽出油Nなど一部8
00円）、軽質ソルベ
ントは油種によって8
00〜2万8000円、
重質ソルベントも80
0〜2万9000円の値
上げだった。